

平成十五年度 札幌光星中学校入学試験問題 国語

注意事項

- 一、 試験時間は、四十五分間です。
- 二、 開始の合図により、始めて下さい。
- 三、 印刷が不明な場合のほかは、問題についての質問は受けません。
- 四、 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 五、 試験終了後は、解答用紙回収が終わるまで、席を立たず、静かにしてください。

問題一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一人の人間でも、年齢を重ねるに連れて、一つの同じ書物を相手にするとき、それとの付き合い方は変わっていきます。私は、小学校の低学年のときから、¹父親の書棚にあった漱石全集を繰り返し繰り返し読んできました。重要な作品のなかには、ほとんど暗記してしまったものもあります。それでも同じ作品を繰り返し読み返すのは、字面の上では暗記してしまうほどの文章から、時に応じて、新しい世界を拓かれることがあるからです。

夏目漱石の作品は、人間の理解という領域で、私という個人を作り上げたときえ言えます。私は漱石の作品で描かれる男性の、好ましい性格も（こちらの方はあまり自分のものとはならなかったのですが）、^{＊1}厭わしい性格も、自分のなかに見出します。（A）最後の作品となった『明暗』の主人公は津田という男です。彼は、身勝手に、見栄っ張りで、と書いてしまうと²身もふたもないのですが、そういう人物として描かれています。そして私は、自分のなかに「津田」的な要素が見出せることを否定できないのです。あるいは『三四郎』では、主人公の三四郎を悩ませる女性として美彌子という女性が登場します。私は女性ではないので、美彌子を私のなかに見出すことはないのですが、しかし、私が女性のなかに見出すもののなかには、漱石が描いた（と私が判断する）美彌子の姿（少なくともその一部）が常に付きます。

そうした意味では、私にとって漱石の作品は、自分の体験した世界とは違った世界を届けてくれるものというよりは、「私」そのものであると言った方が³テキセツかもしれません。その点で漱石は私にとっては「別格」です。

もう一つ私にとって「別格」なのは、ありふれているようですが、⁴宮澤賢治です。賢治の作品もかなりの数を暗記してしまうほど、幼い頃から読み続けてきました。『春と修羅』だけは少し⁴長じてから読みましたが、多くの賢治の作品が私に教えたことは、漱石が人間について私に教えたという言い方と並べれば、自然についてであった、ということができます。賢治の作品を読むことは、自然をどのように見ればよいかを学ぶことでした。賢治の作品のなかで描かれるように、私は自然を眺める癖がつかまりました。曇った空から一条の陽光が風にそよぐ草の葉の⁵ウラに届くとき、それはどのように見えるのか。森の腐葉土のなかからきのこはどのように立ちあがるのか。そうしたことから一つのつぎ、自然のなかに確かめることが、私にとって自然を見るということになってしまいました。その意味では、賢治の作品も、私の体験した世界とは違った可能性を見せてくれる、というよりは、私の体験を作り上げるものとして働いたのです。「別格」という^{＊2}所以です。

この二人の作家の著作を除けば、私は、すでに述べたような読書を繰り返してきました。（B）、自分の体験の世界とは異なった、「仮想的現実」に出会うという読書です。多くの場合、それは外国の作家たちの作品でした。これも父親の書棚にあった^{＊3}ドストイェフスキー、ロマン・ローラン、アンドレ・ジッドなどから始まって、読みたいと思うものを片端から読んでいきました。日本の古典的な作品もまた、「別の現実」に出会えるものでした。

父親を高校三年の暮れに失い、経済的に苦しく書物にかけられるお金も極めて限られていた学生時代には、それでも本は買うもの、借りるものではないかと思っていましたので、⁶乏しい懐とソウダンしながら、選びに選んで求めた一冊を、宝物のように読み通す、という体験を続けました。今でも、私はどうしても緊急に入手しなければならず、しかも書店では手に入らないという特別なもの以外には、本を借りる（友人からでも、図書館からでも）習慣がありません。自分でお金を払って求めるといふなかで、経済が深刻に絡んでいた学生時代に、書物の選択眼を養うことができたとも感じています。ベストセラーに手を出さないのも、実は⁸こうした事情だったとも言えます。ベストセラーと呼ばれるものをすべて買っていたらそれだけで、自分に課した書籍代の予算などあつという間になくなってしまっただけでしょうから。

もう一度言います。^{＊4}所詮読書というのは、個人的な営みです。食べ物の好みが人それぞれに異なるように、自分の好みに従って自分の読書体験を造っていくほかはありません。ただ、幸い食べ物の比喩になりましたので、言いますが、食わず嫌いだけは止めましょう。というより食べ物と同じで、人間は読むことを止めて生きては行けないと思うのです。（C）、とにかく、読んでみましょう。申し上げたいことはその一つだけです。

（村上陽一郎『困った注文』）

＊1 厭わしいいやである

＊2 所以理由

＊3 ドストイェフスキー、ロマン・ローラン、アンドレ・ジッド、ロシアやフランスの小説家

＊4 所詮結局

問一——線3「チキセツ」・5「ウラ」・6「ソウタン」を漢字で書きなさい。

問二——線2「身もふたもない」・4「長じてから」の意味としてもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

2「身もふたもない」

4「長じてから」

ア あまりに言い方が失礼すぎ、思いやりがない。

ア 成長してから

イ あまりに情けなさすぎ、どうしようもない。

イ 後になってから

ウ あまりにはつきり言いすぎて、おもしろみがない。

ウ 考えてから

エ あまりに性格がひどすぎて、味わいがいい。

エ 勉強してから

問三 (A) (B) (C) に入れるのにもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

ア だから イ たとえば ウ しかし エ つまり

問四——線1「父親の書棚にあった漱石全集を繰り返し繰り返し読んできました」とありますが、それはなぜですか。その理由にあたる部分を本文中から二十字以内でぬき出し、初めと終わりの四字で答えなさい。

問五——線7「今でも」はどこにかかっていますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 入手しなければならず イ 手に入らないという ウ 本を借りる エ 習慣がありません

問六——線8「こうした事情」とはどういう事情ですか。解答らんに合う形で、本文中から二十字以上二十五字以内でぬき出し、初めと終わりの四字で答えなさい。

問七 筆者にとって、夏目漱石と宮澤賢治の作品が「別格」だったのはなぜですか。次の語句をもちいて、五十字以上六十字以内で答えなさい。

(語句) 個人 自然

問題二 例にならって、次の(1)～(5)のそれぞれの字に共通してつけられる「へん・かんむり・にょう・あし」のいずれかを補い、一つの熟語を完成させなさい。

(例) 月音 ↓ 明暗

(1) 市未 ↓

(2) 音士 ↓

(3) 斤首 ↓

(4) 旨軍 ↓

(5) 各至 ↓

問題三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ぼくは草むらに立っていた。もう何時間も立ったままで、じいつとなにかをまっていた。

(A) と考えながら、胸までのふかしの草のなかに立っていた。

そのとき、ぼくのかたのあたりをつつくものがある。ぼくはそのとき、古ぼけたゆかたを着ていた。こんな古いゆかた、きつととうさんの子どもころのものだなと思っていると、こんどは、かたをふわりとつかまれた。(B) (ぶりむいて、ぼくはびっくりした。

馬が立っていたからだ。札幌生まれのぼくは、こんなちかくで馬の顔を見るのははじめてだった。目が大きいこと、目から口までのあいだがいやになるほどおいこと。ぼくは、めずらしくて、じっくりと見てやった。

馬は、こんどはぼくのゆかたのそでをくわえて、ひっぱる。そして、草むらのおくへ歩きだした。

(C) 馬は、ふりかえって、またぼくをよんだ。

(D) (くやしうて、大きな声で馬にいった。馬はあきらめたのか、がっくりと首をおとして、林のおくへきえていった。

「どうした、一郎、うなったりして。つかれていやなゆめでも見たか。」

とうさんにかたをゆすぶられて、ぼくは目をさました。へんなゆめだった。

そのあと、またゆめのなかの世界へひきこまれながら考えた。あのとき、なにをまっていたのだろう。いったい、なにをまっていたのだろう。

気がつくと、また草っ原だった。むこうに草をくっている馬が見える。空は明るくかがやいて馬のすがたは逆光のなかで切り絵のようだ。

¹ 馬は四本の足とながい顔で地面とつながっている。

おうい。こつちにおいで。よぶと、馬はすつと首をあげた。そのとたん、日がてって夏なのに、² 吹雪がやってきた。馬のすがたがぼうつとかすんで見えなくなった。目をさますとかたのあたりがつかめたかった。

つぎの日の朝。

昨夜おそくついたノリコおばさんが、だれよりもはやくおきて、³ 仏壇で、お経をあげている。

⁴ みんながびっくりした。

「どうした。こんなにはやくから。」

病気がちで、結婚していないノリコおばさんをいたわるように、⁵ 勝三おじさんがいった。

勝三おじさんの首はふとくて、つよそうだ。

「あのね。うん。」

白髪の出はじめた小さな頭を、すこしかたむけて、ノリコおばさんは、いいにくそうにいった。

「あのね。けさがた、へんなゆめ、見たんだ。」

「どんなゆめよ。」

「馬が出てきてさ、ものいいたそうにして。」

⁵ ぼくは、あつと思つた。手に力がはいった。

「なにかさびしそうな馬でさ。気になるの。きつと、とうちゃんがゆめを見させたんでないかと思つて…」

このおばさんは、⁶ おじいちゃんのことをへとうちゃん」とよんだ。おじいちゃんが死ぬころいちはん気にかけていたのが、おばさんの将来のことだったそうだ。

「あら。おかしい。私も馬のゆめだった。」

タカコちゃんのおばさんが、このとき、きみわるそうな声をだした。ここまできたら、ぼくもかくしているわけにはいかない。

「とうさん。ぼくも馬のゆめ見たんだ。でも、べつにきみわるくなんか、なかったよ。」

みんなは、顔を見あわせた。

「やっぱり。やっぱりなんだ。とうちゃんがなにかいいいたんだ。馬をまったく人間とおなじように大切にしたら人だったの。」

「まあ、いいさ。ゆめぐらい見るさ。」

勝三おじさんはこういったが、なにかを感じはじめているようだった。

「勝三。あなたへ、^{*}馬頭観音さん」をだいにしているかい。これ、きつと馬頭さんのせいだ。」

ノリコおばさんは、泣きそうな声だった。

「馬頭さんか。そういえば、何年もいつてみてないな。」

「それだ。それだ。」

ノリコおばさんは、泣きながらいった。

「みんなに、ひみつにしてたけど、去年、わたし、へホトケオロシをやったの。したら、もう、もう、とうちゃんのあのしわがれた声で、馬をたのむぞ。馬をたのむぞって、はつきりいったの。」

「ばか、ホトケオロシすると、ホトケさまの位くらがさがるから、するもんでないっていうぞ。寺の⁷坊主ぼくしなんかは、ひどくいやがる。」

勝三おじさんにいわれて、

「んだって、とうちゃんに、わたし、会いたかったんだもの。」

ノリコおばさんは、だだっ子のようにかたをふるわせて泣いた。タカコちゃんの姉のユメコさんも目をおさえていた。

(加藤多一『原野にとぶ橋けんや』)

* 馬頭観音ばとうくわんおん馬が病氣やけがをしないように守る仏

問一 —— 線2「吹雪」・3「お経」・7「坊主」の読みををひらがなで書きなさい。

問二 (A) ～ (D) に入れるのにもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

ア だれ。だれなの。

イ だめなんだ。まっているんだもの。まっていなきやならないんだ。

ウ そうか。ついてこいっていうんだな。

エ おかしい。なにを、だれをまっているんだらう。

問三 —— 線1「馬は四本の足とながい顔で地面とつながっている」とありますが、馬のどういう様子を表していますか。わ

かりやすく答えなさい。

問四 —— 線4「みんながびっくりした」とありますが、本文中に登場する「みんな」とは全部で何人ですか。人数を答えなさい。

問五 —— 線5「ぼくは、あつと思った。手に力がいっぱ」とありますが、それはなぜですか。十五字以内で答えなさい。

問六 —— 線6の「おじいちゃん」はどういう人でしたか。それを具体的に示す部分を二十五字以内でぬき出し、初めと終わりの四字で答えなさい。

問七 本文中で、「ぼく」は二度「ゆめ」を見えています。その「ゆめ」の部分を本文中からぬき出し、それぞれ初めと終わりの七字で答えなさい。